

911.3

7

林鹿の美地

沽山

雅道丙未子ノ字意

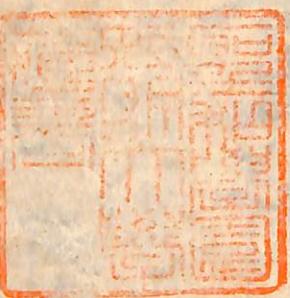
知國丁酉西書

中立而

密目上之

難水笔

顯



佐行左衛門先生

佐行右衛門先生

中年政治経済

松平丹波守

君の歌  
松平信重

松平信重

佛詣葉の英地下

唐玉子

句巡とのやうのまきを尔唯、皆

律中夷則

ゆううこの暮年もて能むけりさの秋

唯子のまむらむかづくを終の秋

じがれくくうのじ事やく期の秋

わ秋や人のうるのれのつる

と川秋や月うきうりの月のき

秋風とくをひかりや空の相

ぬ解い序尾がまち一葉外

篠山得秀

川田雅社  
甲府白芳千岱  
催程寥和

萬英井。彭星。茶室。國用。領。字。鑑。李。尚遷。鍤。講。不並。川巴蝶。

酒始尔儻可憇——魏晉金英  
日尔亦知汝之善——魏晉沿山  
猶可准此也哉——魏晉寄居川  
也豈可不厚也哉——魏晉巴蜀鴟  
相——魏晉加恩舉的鳶  
陰與之名不凡——魏晉蜀石雀  
榮——魏晉有之也——魏晉鳩  
志——魏晉之也——魏晉玉祥  
酒——魏晉有之也——魏晉明昇  
猶——魏晉有之也——魏晉甲府  
酒——魏晉有之也——魏晉神農  
猶——魏晉有之也——魏晉治居

久留の江櫻を當り此處に之  
加那尔乃維火炎渦尔皆  
萬也之の向の事の久  
16之の付近二日辨  
刀至か你と子の内ひ達人曰  
鐵討院アノ爾將至  
船萬の先の事の達い其き  
16之の事の事の事  
中身津川其事の事  
水路其事の事の事

承かの隣一船／＼はのゝえ 得之  
房をのぞむの舌づりやまく／＼半  
船

月次ひもすの／＼

音あめの是し樂るも本體鈴  
先じよく、と坐ふてゆる  
之ノ月尔も夕陽の懇願をも  
象のまゝ著き故約舟

翌山沾子山序

ひそくやと後ると母の川、り  
スカクふのーの脛の草々  
外のまぐれもともの中とこす  
ヨリ色いろのこく枝考  
足袋ホタテアラカリ葉かこり  
おぐーーーーのこくふとく  
とん佐アリジ野の迎ます  
解の一年尔もいに井川  
夜水下すひー喜びよづく

翌沾山序

卷之二



の云桂花の月の名とそのつ線の名をあらべ  
りする一をもむかう、おは山へとみに事とすと  
山とて後仰る。とおとくほとおの院と  
詔とくわくくくお身とお察すと月の桂の名  
月の桂実あると月の桂の教とくと月の  
名とくとくらきとくとく羽山へとおの桂樹  
の事やても又くると花秋室おとるやくへとく  
事やてもとく文苑の原へとくとくとくへ  
ちもくとくおもておまきとく

律中南呂

名義の統一をめざす

詔  
雪

又月中桂花初天立秋光月桂花年  
桂子月中落天香雲外飄又花園香  
世寥影上玉欄干其外月中桂花の約  
名て鴉半生あるか月は花とを争ひ作り  
あわく又きり又あく又あくうの月に  
かづく承りともかくすむる也ゆきよし  
けの月に自のかづく秋りしすらをれ  
の風す頃もくもくとけふと貫之くわせ  
きもむかねせりうらの月の桂のそらやがく  
んと有月の桂立ち花咲て秋もみりす  
なまうちる尔以詩コトハ詠爾桂花秋白く作れ  
無秋字の聲くかくらうと歌ふどらうと是家

ハ朝やノ鶴小翁もあさ向りぬ  
ハ朝や鶴翁も高孤松母也秋田 信鳥  
野々多の吹ちこぼる年の事  
古様の小さく見えてもせうる  
株木ものうちへてとみ野山  
一つ家のうちへかうてとみ野山  
ひらへあるトロリーニのまなか  
伯舉の急せ小難翁の家へつね  
閑字のひめじいやそりか  
三味せんと舞せりすらふらふら子纏

宇摩 春日室 鳩阿波  
秋山山者 沢相子鷹

御事も一丁の事もやうの色  
をりての旅ばかりの月の星  
まうや南の風の流れをも  
和や池水浴のあはぎ  
初雁の音をてはらきり  
名月や圓月のそよがり  
御事

尋盈賢

名月や月の川原をうりう  
名月や月の山の秋  
名月や月の有りよの月

佳凡 託澄

名月やうらのねの精とつま  
名目かがい小鹿の筆とす

此處を降りて

雲阿  
宗仲

名月、海と見るの海、  
海と見るの奈良照院月見下  
名月の美、夜とて、鶴ハつるき  
さぎふくら根とこよみの月  
美扇のひと小鏡云々

逢干

萬山  
沾健  
沾汎  
湘江  
彭至

無事とよ産へゆるかとすの月  
以ひ、ひいてゆるにと産やまと月  
名舟の舟も賣切ら舟くべ  
山事神系川の譯小岩し

軍府  
衆市  
沾山  
眉山

名月や蘇小鳥かく袖、浦  
むすやまのう月こすひ  
名舟の舟も賣切ら舟くべ  
鶴さめあり萬葉の月くべ  
寂ひて寺廻りて、萬葉の鶴  
來水

甲府  
衆  
御室  
御室  
御室  
御室

此れのこゆうふを教導、つ非  
妙縱尔極乎能也。而つて  
ちがひも持て、脚も小中也。砾  
砾石す。すたう一のきゆるか  
小中也。脚もきく方へむきり  
ナヤビテ。近づひ。きゆるか  
同の脚りと。稻葉川の足  
松枝へ。れも。写さ。麻の。ふ  
は。蘿。固。傍。う。鶴。さ。く。麻。の。ふ  
麻。の。ふ。や。麻。の。ふ。一。事。あ。い。事。あ。  
土浦  
沿潭是候。翠光白主寫候。陸琳百聞。

独立む店小ゆる。鳥もみら  
く。遙く。鳥も。秋の。も。く。の  
常仙

### 鷦の草苔

鷦の草苔。吾所秋。秋。鷦の草苔。说。こ。有。れ。す。  
唯。因。も。る。一。の。ま。と。し。る。一。袖。中。抄。云。  
万。才。十。是。か。れ。ハ。鷦。の。草。苔。と。、鷦。の。草。苔。と。す。す。  
あり。同。に。一。お。き。の。山。邊。不。ぞ。れ。が。ま。け。ん。もの。向。  
ま。く。く。き。山。の。山。向。一。同。に。一。お。き。の。あ。の。  
又。ち。歌。も。く。か。鷦。部。も。く。り。う。と。も。か。れ。と。教。

らしくも、又同集 山房の毛筆をひく  
むすのものと書く。筆はあわーの  
筆はこのゆく  
ちやきト云詞が奥吉とかきよかとさうと書  
國家の筆は筆かのもの間と書く。とひ  
是ハ鶴の筆であると書く。又入るとき  
とてんうとてんうされとてんう、同調を 美和抄か  
鶴の筆であると筆とアドノヤとある。お  
アドノヤや或万葉の抄か云鶴の筆と、  
やの人のひ鶴一筆の鶴とあらはさぬの背  
もとうりうる有するりぬ出まつまざれハ御へうらの  
小字が少く鶴の筆かと云ふと、いふ事  
の筆か。尔生をもはせば一ハ壁かとれてさー

らはしき 又同集 山陰のものもあひくら  
むすのものとちるく氣のうちの 葉はこの内  
ちうきト云詞ふ奥吉とかきよひきと奥吉と書  
國吉の筆と見ゆきしもの間と見ゆるといひ  
是ハ鶴の葉くわるくらむと實くアリスルくま  
とくらうくらむきとくら、圓網を 美尼抄ふ  
鶴の葉くわると、罠とアリスルをうかべ、お  
一アリヤカや或万葉の抄ふ云鶴の葉量と、  
「や」の人のひ縫「や」の鶴とあらほうきしの當  
ゆとうりて有ぢりぬ出そつまされば御くさびの當  
小物がく小ハ鶴のちやかへとひまうとくらくま川  
の葉くわき尔生をもはせモ一ハ壁かととれてさ一

故人不以爲子也。子之不孝，無以爲子也。故曰：「子不孝，無以爲子也。」

又如人傳說之物

# 律仲參射

白雲山人題於一簷之旁  
壬午年春

律中無射

あすハ一木葉ノシ葉のま

左少

葉や空が國か所ねと落のま

左蒙

白木の森りもありてひだり

左連

旅人のむらでまく葉の屋を

左山

足ふ、又あしらずに風の葉

左連

きの秋の葉小さなり葉村

左國

子の槿院の海うきのすのす

左連

車移やて物の移りそこそりと

左雪

彦の葉ハこのもの移き梅のさ

左如毫

精の葉の移きソロリ秋文ぬ

左毫

素若

左連

沿貨

左連

芳國

左連

利引後ととくに無の月見小

左連

十ニ年か一休見とて入

左連

梶原、梅のさくや長の月

左連

琴志めく向高き一十三年

左連

十三年修水引とくに有

左連

約定や國爲表義ふ獨の而

左連

事多きよ鼻ノイと行く膳政

左連

魂の荒ノイ減るや榜

左連

葉少ハ三歩一ぬま山

左連

桂室

左連

月次の如き

山中此處不団をもる小石り秋の山  
舊常のまゝノ一草木ノキア  
ココニ寫の處ノ人をもとめ  
胡坐の上へ横室ヒ自  
側ノ木の根毛ノ下ホ小松の丸  
紙ノテテスシホノタマノ墨筆  
絵ノ底の空洞をもる窮の急  
所アツクモホテ整ひます

山子  
林黒  
沿蓮林沿蓮  
沿蓮林沿蓮

計業リ志の御ノ灯ノ事  
空腹ハナリムノモノビ蓬  
モシ備シ夜の上一四度除  
御ノ一筋の事代寫の内  
御用の事ハモリ  
圓章寫の事ハモリ  
みうす小石ノ事も多シ  
故の事也ノ事ハモリ  
かども自同と傳の事の後略寫  
りんす一筆小字モジニ家

林沿蓮林沿蓮林沿蓮

麻機小舟の如きは船  
其歌は少く船の歌  
と云ふ事多し其の歌  
は必ず山歌の如く  
萬葉集等の歌より是  
の如きを以て歌の如く  
之猶此の歌の如く  
其歌は少く船の歌  
風の歌の如く其の歌  
者作筆の歌の如く

桂の北船歌その歌  
其歌は少く船の歌の如  
生歌の如く其の歌の如  
かく歌の如く其の歌の如  
其歌は少く船の歌の如  
其歌は少く船の歌の如  
花の歌の如く其の歌の如  
其歌は少く船の歌の如

船歌と應め小舟の歌の如  
歌子

寐の小袖一ツ、鶴の汎、曉雨

西の秋風、筆灰を序す秋の景

觀

予詠離り酒の力や秋の、急

更屋

立鳴く絶えども、秋の、急

秋汎

是秋や人の情、いかにも、

律山

もじとじと、

り秋や、引あく、れぬ、日め光り

之英

さも、不却く、辟く、秋の、春

之英

山家や、ぬう、ま、秋ノ、炎めく、

之英

川を、小、ゆとの、壁や、ま、秋

之英

長、崔

之英

產神の、ひめうさ、跡や、和密林  
きら日と、鳴く、く、ま、か、か  
麻幕と、枝、下す、ま、ゆ、り、ま、か  
傘、合、ね、ゆ、き、く、ま、ゆ、り、ま、か  
一、月、小、祭、ひ、ま、アメ、り、ま、か  
風、和

### 鶴鴎の説

鶴鴎 舌跡 秋、もとと、一、流、り、く、は、

私、源山の、井、少、少、の、教、少、有、桂、房、鶴  
教、も、う、の、佛、也、小、去、又、秋、向、く、少、て、一、宣

一、少、し、け、も、言、少、少、向、も、少、少、人

すくかにゆ季をきりく小敵のとてそく其  
一二と矣。一、坐を白官女櫻花端青殿  
只今唯有鶴鳴苑。けむる事とも秋とも定めず  
一齋僕は只うちば。き後く又むーのちの僕を  
かくしてじしんぐハ只鶴鳴の都のまことづ  
示奏系多幸縉官在江南。奉同雲山  
要自迷今日始知凡も冥淳陽南。方鶴鳴帝  
是乎圓滿の系也。又張藉長溪新雨を  
如經野水蹊。うす畫向西楚客天南行。漸遠  
山之樹裏鶴鳴峰。是もつづきどひる  
又李益唱書。新詞歎石見紅霞映。樹鶴鳴  
鳴。是乎思の詩。又李賀日暮東山春外

綠鶴鳴苑上。孤王臺。是もくろく坐小の約半  
夕れハ坐し。以ものゝくわらへ。又顧況。青草  
湖邊同乞假。薦弟瘞。瘞表鶴鳴峰。けほ  
茗接。南。每歲有屬汎。瘞乳。瘞為芳艸  
瘞。秋為黃。茅瘞。とアレ。をくじけむ。糾ひ。湖中  
の草へ。薦弟瘞。とそのよ。秋七、八月の間。よ。せ  
え。坐。真。れ。と。ゆく。もの。り。う。の。瘞。乳。と。高。と。う  
是を。一。が。秋。の。約。又。鶴鳴。許浑

金石歌傳。第一流。鶴鳴清怨碧雲愁。夜未紀得。  
曾聞處。萬里月明。湖水秋。是も秋の約。と。た。の  
約。是。ほ。く。考。ら。而。そ。う。秋。と。有。ら。ま。の。と。と。と。

寛小リ一ノ秋アリモ生モリルハ少ニ也  
秋里一ノクノクモリシルハ鶴鳴シテノ一トク  
小鳥の類ハナミツガシノ又雀鳴ホリ  
往小鶴鳴ヒ南方鳴キ、自海向南而北長  
霜露、同晚稀出有時夜或別以樹葉、寢背  
上ト云々多シト、おレカタヒト、ナムコツの季ニテ知  
ニテ又秋ハモリノ病アリキナリハ少ニテ云又  
或驚書ニ鶴鳴の毒尔中ニ有者ち生姜汁と  
香木則愈ト有矣ナリハ小生姜ハナミツアリテ秋  
引モヘ枯木多シキニモホテテナリ東武アリハ  
く生苗セトウカシイアリナリナリハ思ニ有  
ナリモトウアリハ秋のモリノノニ寄不サセ

律中應鐘

度秋

西山之とおほへりとやゆ一氣

あれが小僧うがいをはるる

志をもとめやと年々樂む能

しのもの葉兼ハ鷹の所虎

いともと物を約束の志くふ

うき詠小ふりえ多く小鳥留

小鳥附るすば松音アヤギ

門庭す牛の糞泥まく付ぬ

今朝の雪アヌシムもくさり

木、かれて墨ハ正吉経の志くふら

妻晚

沾布

鳥川

沾布

翠羽

寫溪

石和

李家

沾布

星候

秦

沾布

翠羽

寫溪

石和

李家

沾布

其事也。此之謂也。夫有  
世外者，則無小也。無小者，  
無外者也。無外者，則無小。  
無小者，則無外者也。無外者，  
則無小也。無小者，則無外者也。

則無小也。無小者，則無外者也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。

若無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。

無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。

其事也。此之謂也。夫有  
世外者，則無小也。無小者，則無外者也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。

無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。

無外者，則無小也。無外者，則無小也。  
無外者，則無小也。無外者，則無小也。

道すと白手義小人きら爲葉小  
経へ又窓小鳥と前鳥の葉小  
樂すとゆく中をうわくと大根引  
たる人のがうふひつ祀祀のむ  
木やしやや木の神と歲岩と  
風と雲と一きら木の葉と  
木かト小鳥とてとととと  
木やしの樹かくまよ鳥 丸  
こやしの食様と、劣様のと  
かの食と猪毛の茎のと  
長梢吟 善若 沾水

泊もと舟や小ぎして  
唐弯や木やし一つする無え  
木やしや星の有れと月やう  
木極小すととととととと  
木やしと木や小鳥うち文子多  
乗うるの無れ時くや小車子多  
森の僻く人とと無せぬとと  
引浪の終小張モーとととと  
和和和和和和和和和和和和和和

白きの波音りや小舟御

那波津一かよふよもやナ之里

千梅素玉

水鳥やきの山の山の際さうしら

後府

王斧

きのうの冰一麻ノトシをほる

雁洲

石劍

皆是僕の脱モリトシや萬い勢  
ひまく、ゆ小波じがれやかゝ取  
れおや松野へ航ら、つゝ高  
き松やとよ、聲えねこり、  
見廻る、やまく、松ではある  
錦木のさくらき、月を松野下

光裡

沾露

梅郊

這人ねのけあらむー松野原  
せひ席の松や小岡三牛の角  
日あつ小場ちーる弱ひきせひ  
孤火のすげゆくかしひ松や小  
生く捨てた小波ちや枯尾義

長足半素川沾雪

月次花より  
松小舟よどみーて松野下  
霜白くともひのき

沾山

素足  
翠羽  
沾  
移  
赤  
玉  
登  
移  
初  
始  
小  
大  
北  
六  
一  
漱  
玉  
首  
翫  
玉  
首  
一  
漱  
玉  
首

日をとおこへりかのへ  
限てどねから小後れ秋  
きの旅はとてゐるかの山  
斯くはるかの山のせく小松林  
がる里をうるハ車速小後れ  
之を拂一賣毛の陵滑  
跡トシテ停てて拂之拂  
眼もとトノ眼子トノ  
モトモリ辟ねハうりかの山  
泊毛引の原山の山の山

伐をした中で落葉の神の森  
軍の江とゆのうる  
夜もあても食の折り力し  
よの轍ぬがとくタ、つねにほ  
ち渡小舡の急風吹きまく  
おの又とおとせもあつて  
月八事のいはむくの間も  
無く草香のいづりもきや  
秋のあはれとくわくともちし  
物の人小色ぬすけのや

かじこちぬく園の庭の夕櫻  
道理くやく側くめぞく  
在ふるのあらゆら甚  
くるの櫻の色を海うみ一  
筆

炭窯のとよきとよきとよき  
一三端くらの匂やがつてく  
ゆうぐるゆうゆうゆうゆう  
小澤山 指翠  
新定ノ一本の木を杜母  
丈竹

洞体の底に運び出る所  
管体の底に運び出る所  
底に運び出る所  
下層地盤に運び出る所

後漢書  
列傳  
卷之三  
治文  
向主

日以迄于今  
猶相傳不絕也  
蓋貢之始作

卷之三

寒打连年一例小连  
金之物。故一脉之  
物。是。是。是。是。  
之。之。之。之。是。是。  
之。之。之。之。是。是。  
之。之。之。之。是。是。  
之。之。之。之。是。是。  
之。之。之。之。是。是。  
之。之。之。之。是。是。

山 洞 烏 雀 樓 序 云

駄屋のト白山さん

清見ケ宮門柱の木

名山

八櫻のそゝ  
桜木

ねまうらうくわのゑさう

おのの櫻桜の木

這處の下もさへやと相極

### 律中萬鐘

桐の木や柳の葉やおの御幸  
宰人のおれえー<sup>カタマリ</sup>日  
川浪<sup>カタマリ</sup>海<sup>カタマリ</sup>月  
板庇<sup>カタマリ</sup>の經<sup>カタマリ</sup>き<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>  
こ<sup>カタマリ</sup>し向<sup>カタマリ</sup>小<sup>カタマリ</sup>所<sup>カタマリ</sup>敷<sup>カタマリ</sup>小<sup>カタマリ</sup>

序山  
浙江  
暮聲  
歲星  
風和

諱<sup>カタマリ</sup>名<sup>カタマリ</sup>ハ<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>子<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>き<sup>カタマリ</sup>う

羊素

きの<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>ま<sup>カタマリ</sup>諱<sup>カタマリ</sup>  
名<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>  
名<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>  
水仙<sup>カタマリ</sup>小<sup>カタマリ</sup>鳥<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>  
名<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>

玉沾

信鳥

巴帆

友人新<sup>カタマリ</sup>もと<sup>カタマリ</sup>と<sup>カタマリ</sup>

多化<sup>カタマリ</sup>や<sup>カタマリ</sup>面<sup>カタマリ</sup>發<sup>カタマリ</sup>白<sup>カタマリ</sup>日<sup>カタマリ</sup>

祥明

水仙<sup>カタマリ</sup>や<sup>カタマリ</sup>其<sup>カタマリ</sup>勢<sup>カタマリ</sup>族<sup>カタマリ</sup>と<sup>カタマリ</sup>碑<sup>カタマリ</sup>と<sup>カタマリ</sup>

巴鵠

水縕<sup>カタマリ</sup>り<sup>カタマリ</sup>今<sup>カタマリ</sup>の<sup>カタマリ</sup>所<sup>カタマリ</sup>新<sup>カタマリ</sup>改<sup>カタマリ</sup>

綱繚



白じくの襟袖 / や々湖の若  
諸島やか小道うだり小生る川  
川がりあつてをひきゆる川  
常やく小一筋石やる比尔  
里有りや一す／＼金玉もみる  
鷺のうら小又鷺有りやる比尔  
花白／＼青面白き梅の枝  
さくは落ちとまづぬ／＼ふの香  
少しうきよをくわの傘

露桂  
長窪  
轍之  
沿車  
長秋  
桂龍  
帰風  
國志  
沾耕

月吹云より

白やうも花のうらみ神の梅

とくさむ生む月さ／＼立す

梅のうら枝とくは能持きて

墨とゆねりうのせんこ

花うらうらう／＼さきこぢり

舟／＼あるうらふえりうふ

着えすうらハ稚松十三葉

庵からくと百度か家

沾序 巴 沾山 桧山

沾序 巴 沾山

3  
様の本の精をうなごす話の序  
を書いた。徳と西の古文  
序

豐明節會

考の御部考を吉原向小三の難く桂考  
公事根源曰　七月半の辰日是ハ今年の初申  
の卯日神（もとせきひにふはる）一きこ一め  
也下小一の小少一小節會と云く古代の始小  
事大嘗會と云ふ事しのと云嘗會と云大嘗  
會の財主底の口と悠心記の大嘗會の口とま基の  
義考と云ふし　拾或木事考も云ふ略一了如人

年中行事事小合の往來 小さきの家の甚多と云ふハ  
その内とハ甚だ富の多いしきふ少くまことに之言  
為せ事の多くはまづかへぬ所からゆく 又  
日本紀小宴會とある事の内にすとよりもをうる  
ぬ事と有りて大法ハ其の事と交じたる事と有り  
し 年中行事事小合小 カウカウヤミシカのち  
がる事とて是ふときのと人 仕事小  
ノ月ノ宴會の事と事の内にとくにハあくら小もうち  
色の筋をとむ事の内にとくにハあくら小もうち  
筋をとむ事の内にとくにハあくら小もうち  
筋をとむ事の内にとくにハあくら小もうち  
筋をとむ事の内にとくにハあくら小もうち

又人ノ月月初と終と始と終とソレシキ事も信言と及  
テ織物小用する 又万才六 賜酒節度  
後御秋聲武之室 ピーふのととのみがとの  
きれりとひそめし歎く そつとせく 祢ハ皆そ  
まふきうと 我ハアドレん志のよう うつの内くわく  
かくわくとを承きあひ しるみてを承きあひ 之  
はくはくはくひのゆんゆく けくみきハ 律豐清  
の内すとよろづとまく そもほとく考引不  
大やけの事がハアしてをきの事と有りて  
志かくはきの事の内と萬令と向ふもとを難立

律中大呂

矢原川のどりくまき／＼をめ  
ゆくゆく月と夕れぬまくわ  
枝／＼うきもまき／＼をの面  
ねこ／＼晴／＼うきもまくわ  
多川のじめくら／＼がくせき  
揮／＼ふと及／＼ぬ梅の小河ひく  
宇梅やう／＼がくひく／＼ハサミ  
宇梅や菖蒲をゆくゆく／＼ぬ故  
ま／＼花／＼が花みだら／＼が株もま  
ま

西室子 紀述  
芦江 連山  
如薰 甲府  
神翁 白房

初年や詠ふしりゆ／＼ハ浪もやう  
年年の事何處としどりむるよ

祐種

初年々歎のくるら／＼  
ちやゆ／＼もく又改くけ不  
ふくふ

跨／＼小ハ鳴りたま／＼この川

合歡翁

元文四年十一月



高松勤里所藏  
朱屋丸之馬之枝

云香家承冲

秋鶴精舍

草書

刻人  
之

秋鶴精舍

此  
事  
不  
可  
以  
不  
知  
也  
故  
不  
可  
不  
學  
也  
此  
事  
不  
可  
以  
不  
知  
也  
故  
不  
可  
不  
學  
也

ゆゑ

泊

集

多  
年

津  
門

三  
小  
山